

児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析

PAC(Personal Attitude Construct)Analysis on Friendship in School Age Children

友生 雅夫*・今林 俊一**

TOMONO Masao and IMABAYASHI Shunichi

キーワード：個人別態度構造の分析，自己概念，友人関係，児童

1. 目的

自己概念とは、一般に、認知的、行動的側面を含む比較的包括的な構成概念であると考えられている。榎本(1998)によると、Damon, W. & Hart, D. (1982) は、乳幼児期から青年後期に至るまでの自己概念の発達図式を示している。彼らによると、幼児期・児童期前期には身体的自己、児童期中・後期には行動的自己、青年期前期には社会的自己、青年期後期には心理的自己が順に現れるとしている。

児童期前期では、「髪が長い」「野球をする」といったカテゴリ的な自己規定が自己理解の多くを占めているが、児童期中・後期になると、「人より背が高い」「先生にほめられる」といった他者との比較による自己査定が加わってくる。特に児童期後期では、他者の存在が意識される中で、児童の中には、外界からの要求に合わせて自己を変化させたり、自己の要求に合うように外界を変化させたりできる児童もいる。

われわれは、そのような児童の内面を把握していく際に質問紙や行動観察などを行うことが多い。しかしながら、個々の児童が友人関係を含めた様々な事柄をどのように捉えているか、何に悩んでいるのかを十分に把握できているとは言えない。

そこで、本研究では、児童への質問紙や行動観察に加えて、内藤(1997)が開発した個人別態度構造分析(PAC分析、以下同様)を使用することにした。PAC分析とは、①当該テーマに関する自由連想、②連想項目間の類似度評定、③類似度

距離行列によるクラスター分析、④被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、⑤実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。質問紙では、平均や分散を用いて結果が語られることが多かった。また、行動観察からは、観察者の主観で状態像が把握されることが多かった。これでは、被験者個々の状態像を細かく分析したり、行動の裏に潜む感情について十分に把握することが難しい。

本研究では、質問紙や行動観察にPAC分析を併用することによって、友人関係を個々の児童がどのように捉えているのか、どのようなかわりを求めているのかを教育実践を通して明らかにしたい。

2. 方法

2. 1. 調査対象者

鹿児島県内公立小学校4年生(男子17名、女子21名)計38名。

2. 2. 調査期日

2000年7月～2001年3月

2. 3. 調査場所

調査対象者の所属する教室及び、教育相談室で実施。

2. 4. 調査材料

2. 4. 1. 自己概念の測定

友生(1999)が作成した「自己概念」尺度の質問項目を若干修正した65項目を使用し、4件法で評定を求めた(詳細は、添付資料を参照)。

2. 4. 2. 学校適応感の測定

小泉(1995)の教育環境適応感尺度Ⅱの24項目を使用し、4件法で評定を求めた。

* 鹿児島市立宮川小学校

**鹿児島大学教育学部学校教育(教育心理学)

2. 4. 3. ストレスの測定

長根 (1991) が作成したストレス尺度の20項目を使用し、4件法で回答を求めた。

2. 4. 4. 児童個人別態度構造の分析

内藤 (1997) によって開発されたPAC分析を用い、児童の友達に対するイメージや態度を個別に分析した。まず、友達がいいと感じるとき、そのときの心や体の様子についての連想反応を得た。次に、重要項目順にならべさせた連想項目の類似度を4段階で評定させ、ウォード法によるクラスター分析を行い、各クラスターのイメージや併合理由、各項目の＋イメージを求めた。

3. 結 果

3. 1. 自己概念の測定について

自己概念尺度の測定は、7月と12月の2回行われた。Table1-1は、自己概念得点と標準偏差を表すものである。これらを比較すると、クラス全体の自己概念得点及び標準偏差は、ほぼ同様の結果を示していることが分かる。

Table1-1 自己概念の平均得点と標準偏差

	7月	12月
平均	2.60	2.58
SD	0.45	0.41

3. 2. 学校適応感の測定について

学校適応感尺度の測定も、7月と12月の2回行われた。Table1-2は、学校適応感の得点と標準偏差を表すものである。これらを比較すると、クラス全体の学校適応感得点及び標準偏差は、やや低下していることが分かる。

Table1-2 学校適応感の平均得点と標準偏差

	7月	12月
平均	2.86	2.73
SD	0.42	0.39

3. 3. ストレスの測定について

ストレス尺度の測定も、7月と12月の2回行われた。Table1-3は、ストレス得点と標準偏差を表すものである。これらを比較すると、クラス全体のストレス得点及び標準偏差は、ほぼ同様の結果を示していることが分かる。

Table1-3 ストレスの平均得点と標準偏差

	7月	12月
平均	2.81	2.89
SD	0.48	0.46

3. 4. 児童個人別態度構造の分析について

3. 4. 1. 被験者A (女児) の事例

被験者Aは、二人きょうだいの長子である。Aは本や辞典などを読んで室内で過ごすことが多い。また、友達を作ることはいまうまくなく、孤立してしまいうこともある。自己概念得点は、7月時点では、平均より低い方であった (Table1-4参照)。

Table1-4 被験者Aの自己概念、ストレス、学校適応感得点

	自己概念	ストレス	学校適応感
7月	2.57	2.90	2.33
12月	2.20	2.25	2.25

3. 4. 2. 被験者Aへの関わり方について

一学期のAの様子から、Aに関する関わり方として、以下のことに留意していくことにした。

- ・ Aは、昼休みに教室で一人で過ごすことが多く、ドッジボールなどの運動を苦手としている。見ているだけでもいいので、参加しようとする意欲を持たせる。
- ・ Aは、休み時間に、担任教師に話をすることが多い。Aの話に十分に耳を傾けていくように努める。
- ・ Aは、歌を歌ったり、ピアノを演奏したりすることが好きである。Aが楽しく活動できている場面では、活動への意欲を十分認める。
- ・ Aは、クラスメイトのB (女児) を大変信頼している。家も近くであり、登下校の際にお互いが声をかけられるようにBにも話をする。
- ・ Aは、交流学習でやってくるクラスメイトのD (男児) に声をかけてくれることが多い。そのやさしさを帰りの会やかかきカードを使って紹介し、Aのよさに気づく場面を作っていく。
- ・ 担任がクラスメイトに対して、一人である児童がいたら、声をかけたり、一緒に遊んだりする必要があることを機会があるごとに話をしていく。

3. 4. 3. Aの二学期の様子から

Aのクラスでは、木曜日がクラス全員で遊ぶ日

となっている。Aは、二学期当初は、みんなで遊ぶ日も、教室にいることがあった。友達の誘いで一緒に出て行くことはあったが、乗り気ではなかった。ところが、2ヶ月ほど経ったころから教室へ帰ってくると「今日は、長縄が跳べた」とか、「ドッジボールで逃げ続けることができた」などと担任教師に話してくれるようになった。友達の誘いが心地よくなってきたようである。これらのことがきっかけとなったのか、Aのストレス得点は、12月時点では、0.75点減少している。しかしながら、自己概念得点も、0.37点低下しており、また、学校適応感は2.25点と依然としてクラス全体の平均より低かった (Table1-4参照)。

質問紙を通して、Aの自己概念や学校適応感がクラス全体の平均よりかなり低いところにあることが分かった。また、行動観察を通して、Aに対してクラスメイトが意識的に声かけしている様子も見られた。しかしながら、Aがクラスの活動にスムーズに参加できないのは、友達にさらに他のかわりを求めているのではないかと考えられた。

そこで、PAC分析を用いて、Aの自己概念について友達との関係から探っていく。

3. 4. 4. 2000年9月のPAC分析

連想刺激を「友達っていいなと思うところはどんなところですか」とし、そのイメージについて話してもらったところ、連想項目およびクラスター分析の結果は、Fig. 1のようになった。

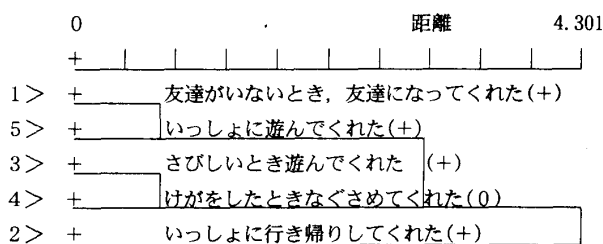


Fig. 1 2000年9月の被験者Aのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの () 内の符号は各項目でのイメージ

被験者Aの重要順位と項目の+-イメージ

重要順位の高い順に①友達がいないときの友達になってくれた②いっしょに行き帰りしてくれた③さびしいとき遊んでくれた等となる。友達の存在が、Aの心の支えとなっていることを示してい

る。項目の+-イメージは、+が4、0が1とプラスのイメージが強い。

被験者Aによるクラスターの解釈

クラスター1は、「友達がいないとき、友達になってくれた」～「いっしょに遊んでくれた」の2項目：「友達がいないとき、友達になってくれた」は、Aの近所に住んでいた友達が引っ越していなくなったとき、クラスメイトのBが友達になってくれた様子。「いっしょに遊んでくれた」は、Aが、クラスメイトのBとドールハウスで遊んでいる様子。クラスター1を見ると、Bと友達になって一緒に遊んでいる様子が分かる。

クラスター2は、「さびしいとき遊んでくれた」～「けがをしたときなぐさめてくれた」の2項目：「さびしいとき遊んでくれた」は、Aが、2、3年のとき近所のM(女兒)が慰めて遊んでくれた様子。「けがをしたときなぐさめてくれた」は、Aがけがをしたとき、近所のS(女兒)がなぐさめてくれた様子。クラスター2を見ると、Aが泣いているとき近所のM、Sが慰めてくれる様子が表れている。

クラスター3は、「いっしょに行き帰りしてくれた」の1項目：「いっしょに行き帰りしてくれた」は、クラスメイトのBが、Aと一緒に帰ってくれる様子。クラスター3を見ると、Aが下校のときBと話ながら帰る楽しい様子が表れている。

クラスター1と2の比較：共通点は、Aに対して友達の方から声をかけてくれること。違う点は、クラスター1は、Aが友達が引っ越していきとても寂しい様子を表し、クラスター2は、クラスター1ほどではないがAがけがをしたり、遊ぶ友達がいなかったときに寂しい様子を表している。

クラスター2と3の比較：共通点は、分からないということだった。違う点は、クラスター2は、Aがけがをしたり、遊ぶ友達がいなかったりすることは悲しいことであるが、クラスター3のクラスメイトと行き帰りできることは、楽しいことである。

クラスター3と1の比較：共通点は、Bは友達がいないときにAと一緒に遊んでくれたり、登下校をともにしてくれたりする様子を表している。違う点は、クラスター1は、AがBと一緒に遊ん

でいる様子であるが、クラスター3は、AがBと登下校のとき一緒に話しながら帰る様子を表している。

被験者Aについての総合的解釈

クラスター1について：「友達がいなくて、一緒に友達になってくれた」は、Aの近所に住んでいた友達が全員引っ越してしまったとき、クラスメイトのBが友達になってくれた様子である。「一緒に遊んでくれた」もそのBと人形遊びをした様子である。Aの住んでいるところは通勤者の比較的多い地域であり、入れ替わりが多く、Aの性格上、なかなか友達を作りにくいという環境でもある。そんなときにクラスメイトのBが友達になったことはかなり心強かったと思われる。＜自分のさびしさを和らげてくれた友達＞を示すクラスターとなっている。

クラスター2について：このクラスターは、Aの引っ越していった友達との思い出を話してくれたものから構成されている。「さびしいとき遊んでくれた」は、Aが2、3年のころさびしいとき遊んでくれた近所の友達の様子、「けがをしたときなぐさめてくれた」は、Aの近所に住んでいる別の友達が慰めてくれた様子を表している。Aにとっては近所に住んでいた二人の友達が、遊んでくれたり、心を癒してくれたりするかなり大きな存在であったようだ。よき理解者を失った悲しみはかなり深かったと思われる。＜自分のよき理解者であった二人の友達＞を示すクラスターとなっている。

クラスター3について：「いっしょに行き帰りしてくれた」は、AがクラスメイトのBと登下校をする様子である。Aは、Bと一緒に登下校をすることで、表情がとてつもなく明るくなった。Bのことを担任に話す機会も増えてきている。＜現在の自分を支えている友達＞を示すクラスターとなっている。

全体について：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、＜自分のさびしさを和らげてくれた友達＞ → ＜自分のよき理解者であった二人の友達＞ → ＜現在の自分を支えている友達＞というように図式化できる。クラスター1とクラスター3の友達は、クラスメイトのBのこと

を指している。Aにとって、友達とは、寂しいとき遊んだり、慰めたりしてくれるよき理解者であり、一緒に行き帰りできるような常にAを支えてくれる存在であると解釈できる。

3. 4. 5. 2001年3月のPAC分析

3月も同様に連想刺激を「友達っていいなと思うところはどんなところですか」とし、そのイメージについて話してもらったところ、連想項目およびクラスター分析の結果は、Fig. 2のようになった。

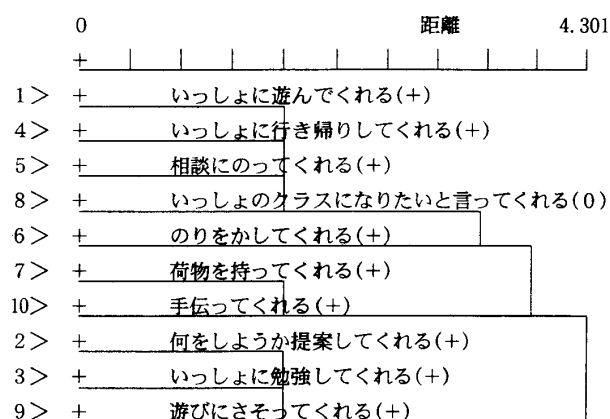


Fig. 2 2001年3月の被験者Aのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの()内の符号は各項目でのイメージ

被験者Aの重要順位と項目の+-イメージ

重要順位の高い順に①いっしょに遊んでくれる②何をしようか提案してくれる③いっしょに勉強してくれる等となる。Aは友達関係においては受動的であり、その働きかけを待っていることが分かる。項目の+-イメージは、+が9、0が1とプラスのイメージが強い。

被験者Aによるクラスターの解釈

クラスター1は、「いっしょに遊んでくれる」～「のりを貸してくれる」の5項目：「いっしょに遊んでくれる」は、クラスメイトのBとY(女児)が昼休みや下校時に突然遊ぼうと言ってきて遊びを考えていたら時間が過ぎる様子。「いっしょに行き帰りしてくれる」は、(クラスメイトのBは忙しいときは帰ってしまうのだが)登校時、Bを迎えに行ったり、下校時Bと一緒に帰る様子。「相談にのってくれる」は、男子がAに対して悪口を言ったとき、クラスメイトのYが言い返してくれる様子。「いっしょのクラスになりたいと言っ

てくれる」は、クラスメイトのBが一緒のクラスになるだけでなくいつでもどこでも一緒にいたい様子。「のりを貸してくれる」は、授業中にC(男児)やBが消しゴムを貸してくれる様子である。クラスター1を見ると、クラスメイトのBがいつもそばにいて遊んだり、登下校を一緒にしたりすることが多いが、その他にもクラスメイトのYやCの存在があることを表している。

クラスター2は、「荷物を持ってくれる」～「手伝ってくれる」の2項目：「荷物を持ってくれる」は、クラスメイトのBと下校時にじゃんけんをしながら帰りBが荷物を持ってくれる様子。「手伝ってくれる」は、長縄をしているときクラスの女子全員が頑張れと言ってくれる様子や男子とけんかをしたとき女子全員が言い返してくれる様子である。クラスター2を見ると、クラスメイトのBを含めた女子全員と一緒に遊んでくれたり、なわとびをしたり、励ましてくれたりする様子を表している。

クラスター3は、「何をしようか提案してくれる」～「遊びに誘ってくれる」の3項目：「何をしようか提案してくれる」は、クラスメイトのBが、図工のとき「どんな物を作る」とか遊びのときに「何して遊ぶ」とか尋ねてくれる様子。「いっしょに勉強してくれる」は、クラスメイトのBといっしょにAの家でふざけあいながら宿題をする様子。「遊びにさそってくれる」は、クラスメイトのBと隣のクラスのT(女児)が遊ぼうと誘ってくれてあっちこっちに行く様子である。クラスター3を見ると、クラスメイトのBを中心とした人々がいっしょに勉強したり遊んだりするときに、Aの気持ちを気づかい声をかけてくれる様子を表している。

クラスター1と2の比較：共通点は、クラスの中でもおとなしい人がAに対して一緒に話したりふざけたりしてくれること。違う点は、クラスター1は、クラスメイトのB、Y、W(女児)のようにあまり大騒ぎしない限られた人のこと。クラスター2は、大騒ぎしない人のことも含めた女子の全体的なことを表している。

クラスター2と3の比較：共通点は、クラスメイトのBが遊んだり、一緒にいたりする様子(い

つでもどこでも一緒という感じ)。違う点は、クラスター2は、クラスメイトのBがいろいろ手伝いをしてくれること。クラスター3は、AがいろいろなことをしないとイケないときクラスメイトのBと一緒に考えてくれることを表している。

クラスター3と1の比較：共通点は、クラスメイトのBはAが何かいやなことがあったりいじめられたりしたとき話を聞いてくれること。違う点は、クラスター1は、クラスメイトのBを中心とした人々がいつもそばにいて寄りそっているようなこと。クラスター3は、クラスメイトのBと隣のクラスのTがAを気づかいながら遊んだり勉強したりすることを表している。

被験者Aについての総合的解釈

クラスター1について：「一緒に遊んでくれる」は、昼休みや下校のときクラスメイトのBとYが遊びに誘ってくれる様子である。「一緒に行き帰りしてくれる」では、A自身も迎えに行くことがあるが、「相談にのってくれる」や「一緒のクラスになりたいと伝えてくれる」「消しゴムを貸してくれる」は友達の方からAを守ってくれたり、寄り添ってくれたり、助けてくれたりする様子である。9月時点のデンドログラムと比べて、クラスメイトに関するイメージが多いこと、クラスメイトのB以外の児童のかかわりが増えていることが分かる。A自身が、9月時点と比べて、友達の支えによって、前向きになっていることが分かる。〈自分を支えてくれている友達〉を示すクラスターとなっている。

クラスター2について：このクラスターは、Aに対する女子のかかわりを表すものから構成されている。「荷物を持ってくれる」は、クラスメイトのBとAが楽しく下校する様子である。「手伝ってくれる」は、クラスの女子全員が長縄をしているとき励ましてくれる様子である。Aは、運動を苦手としていた。そのことで、ドッジボールなど休み時間にクラスの活動に参加できない場面が多かった。Aのクラスにはクラス全員で遊ぶ日が設けてあり、その一つとして長縄をする日があった。Aは、最初ほとんど跳べなかったのだが、クラスの女子の励ましによって参加していくうちに少し

ずつ跳べるようになった。12月のなわとび大会では、Aの活躍によって長縄では、好結果を収めることができた。そのことが、Aにとっても、クラスの他の女子にとってもうれしかったことのようにある。〈自分を温かく励ましてくれたクラスの全員の女子〉を示すクラスターとなっている。

クラスター3について：「何をしようか提案してくれる」は、クラスメイトのBがAに図工のときや遊びのときに尋ねてくれる様子である。「いっしょに勉強してくれる」は、クラスメイトのBと「遊びに誘ってくれる」は、クラスメイトのBと隣のクラスのTと勉強したり、遊んだりする様子である。9月と比べて、Aは、クラスメイトのBとのかかわりを通して、家から離れたところで活動する機会が増えたと話した。Bに対する信頼がより一層増し、心の安定が図れてきているようである。〈自分を積極的にしてくれる友達〉を示すクラスターとなっている。

全体について：全体の構造をクラスター間の関係としてみると、〈自分を支えてくれている友達〉 → 〈自分を温かく励ましてくれたクラスの全員の女子〉 → 〈自分を積極的にしてくれる友達〉というように図式化できる。9月と同様に、クラスメイトのBが支えてくれているという意識は強い。しかしながら、クラスター2のようにクラスの中で特にAが手を差し伸べてほしい場面で学級の多くの女子が手助けしてくれたことはAの自信につながったようである。Aにとって、何でも分かってくれる一人の友達(B)の他にAのことを分かってくれようとする友達が増えてきていると解釈できる。

4. 考 察

被験者Aは、7月時点で自己概念得点や学校適応感得点が平均より低かった例である。被験者Aへの関わりとして、行動観察も通して、Aの話に耳を傾けたり、運動など苦手としているものには教師も一緒に参加したりするような関わり方が大切であると予測された。しかしながら、一回目のPAC分析からは、友達に対するイメージは現在の友達よりもむしろ引越していった昔の友達が遊んでくれたり、慰めてくれたりしたイメージの

方が強いことが明らかとなった。Aは、ふだん一人の友達と行動するか、一人でいることが多かった。そこで、PAC分析で挙げられた友達のことを話題にしたり、担任教師と一緒に遊びに参加させたりして、多くの友達と接する機会を設けることにした。

二学期当初は、引越していった友達のことを話題にすると懐かしそうに話すことが多かった。また、運動は苦手、でも遊びに参加したいというAの思いと、遊びに参加できるようにしてあげたいというクラスメイトの思いがなかなか一致しなかった。しかしながら、Aが長縄というクラスの活動に参加できるようになってからは、クラスメイトにAの目が向けられるようになった。そしてAが長縄を跳べるようになったことは、クラス全体の喜びとなったようである。そのことは、2回目のPAC分析から推察できる。

以上のことから、Aにとって友達とは、信頼して何でも話せるクラスメイトのBのような存在が学級適応を促進する上でも必要であろう。また、担任教師や多くのクラスメイトがAの気持ち(苦手意識や参加意欲など)を十分汲み取り、温かく接したり、励ましたりすることも大切であると考えられる。

5. 要約と結論

本研究の目的は、質問紙や行動観察にPAC分析を併用することによって、友人関係を個々の児童がどのように捉えているのか、どのようなかわりを求めているのかを教育実践を通して明らかにすることであった。

主な結果として、次の2点が明らかにされた。

1. 質問紙や行動観察から被験者の概要をとらえることができ、さらにPAC分析から被験者の内面を細かく理解することができた。
2. PAC分析を時系列的に行うことにより、友達とのかかわりによって個人別の態度構造がどのように変化するかをとらえることができた。

なお、今回の研究では、教育実践に伴う様々な制約の中で実施された。そのため、PAC分析の実施については、他の測度との比較検討をする上において大きな課題が残された。この点を修正し

ての実践研究を行うことが必要であろう。

引用・参考文献

- 榎本博明 1998 「自己」の心理学－自分探しへの誘い－サイエンス社
- 遠藤辰夫・井上祥治・蘭 千壽 1992 セルフ・エスティームの心理学－自己価値の探求－ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係－重みづけした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討－教育心理学研究, 40, 157-163
- 遠藤由美・西 芳弘 1993 青年前期における自己評価の研究 上越教育大学研究紀要, 13(1), 111-119
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究(1)－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討－名古屋大学教育学部紀要, 37, 217-234
- 平石賢二 1993 青年期における自己意識の発達に関する研究(2)－重要な他者からの評価との関連－名古屋大学教育学部紀要, 40, 99-125
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会
- 小泉令三 1986 転校児童の新しい学校への適応過程 教育心理学研究, 34, 289-296
- 小泉令三 1995 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44(4), 295-303
- 小泉令三 1996 教育環境適応尺度Ⅱの小学4年生への適応可能性検討 福岡教育大学紀要, 45(4), 279-283
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析－小学4, 5, 6年を対象にして－教育心理学研究, 39, 182-185
- 内藤哲雄 1993 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究, 33(2), 111-121
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 2000 孤独感のPAC分析－接近・回避ループ型の事例－日本心理学会第64回大会発表論文集, 275
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, 31(3), 245-249
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32(1), 85-94
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1992 児童の心理的ストレスと学習意欲との関連 健康心理学研究, 5(1), 7-19
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1994 小学生用ストレス尺度の開発 健康心理学研究, 7(2), 46-58
- 菅 佐和子 1975 Self-Esteemと対他者関係に関する一研究－青年期を対象として－教育心理学研究, 23(4), 224-229
- 菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55(3), 184-188
- 高石浩一 1992 自己概念の形成にかかわる他者心理学研究, 63(1), 1-7
- 友生雅夫 1999 児童のセルフエスティームについての研究(1)－児童の自己認知の肯定的な側面について－九州心理学会第60回大会発表論文集, 43
- 友生雅夫 2000 児童のセルフエスティームについての研究(2) 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 479
- 友生雅夫 2000 児童のセルフエスティームについての研究(3) 九州心理学会第61回大会発表論文集, 43
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究－20答法での自己記述を手がかりとして－心理学研究, 60(4), 245-252
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68

〔添付資料〕(友生, 1999) 自己概念尺度

あなた自身のふだんの生活について、れいのように
自分があてはまると思うところに○をつけてください。

あてはまる
ややあてはまる
ややあてはまらない
あてはまらない

- (れい) わたしは、なわとびが得意です。… (記入れい) ……………
1. わたしは、みんなが知らないことを知っているとき、自信が持てます。……………
 2. わたしは、運動能力に自信があります。……………
 3. わたしは、人にじまんでできるような習い事をしています。……………
 4. わたしは、何でもじっくり考えて行動します。……………
 5. わたしは、身長が高いことに自信が持てます。……………
 6. わたしには、たくさんの友達があります。……………
 7. わたしは、先生がほめてくれたとき、自信が持てます。……………
 8. わたしは、勉強で、今までやり方がわからなかったことがわかるように
なってきたとき、自信が持てます。……………
 9. わたしは、先生から、「お仕事を手伝ってよ」と言われたとき、自信が持てます。…
 10. わたしは、友達の前で自分の意見や考えを自由に発表できたとき、自信が持てます。……………
 11. わたしは、休み時間、元気よく遊ぶことで自信を持てます。……………
 12. わたしは、自由に使えるお金をたくさん持っています。……………
 13. わたしには、得意な教科があることで自信が持てます。……………
 14. わたしは、運動がうまくできたとき自信が持てます。……………
 15. わたしは、ゲームをしたらまけない自信があります。……………
 16. わたしは、そうじや係の仕事をねばり強くやりとげることで自信が持てます。……………
 17. わたしは、自分の顔に気に入っているところがあることで自信が持てます。……………
 18. わたしには、こまったときに助けてくれる友達がいることで自信が持てます……………
 19. わたしは、友達がほめてくれたとき、自信が持てます。……………
 20. わたしは、勉強で、今まで知らなかったことを学んだとき自信が持てます。……………
 21. わたしは、親から、「仕事を手伝ってよ」と言われたとき、自信が持てます。……………
 22. わたしは、力が強いことに自信を持っています。……………
 23. わたしは、調べたり、観察したりする学習が好きで自信が持っています。……………
 24. わたしには、得意なスポーツがあることで自信が持てます。……………
 25. わたしは、ゲームのソフトをたくさん持っていることで自信が持てます。……………
 26. わたしは、思ったことをはっきり言えることで自信が持てます。……………
 27. わたしは、おしゃれをすることでに自信が持てます。……………
 28. わたしには、じまんでできる友達がいることで自信が持てます。……………
 29. わたしは、親がほめてくれたとき、自信が持てます。……………
 30. わたしは、友達から「仕事を手伝って」と言われたとき、自信が持てます。……………
 31. わたしは、友達に人気があることで自信が持てます。……………
 32. わたしは、勉強を速く終わらせることで自信が持てます。……………
 33. わたしは、スポーツでまわりの人からほめられたとき自信が持てます。……………
 34. わたしは、だれとでもすぐ友達になれることで自信が持てます。……………
 35. わたしは、先生から「あなたにまかせておけば安心だよ」という言葉を聞いたとき
自信が持てます。……………

あてはまる
 ややあてはまる
 ややあてはまらない
 あてはまらない

36. わたしは、勉強をじっくりと進めていくのでまちがいは少ないということで
 自信が持てます。.....
37. わたしは、スポーツができそうなタイプに見られることで自信が持てます。.....
38. わたしは、こまっている人によく声をかけることで自信が持てます。.....
39. わたしには、いっしょに宿題をしたり、勉強したりする友達がいることで
 自信が持てます。.....
40. わたしは、親から「あなたにまかせておけば安心だよ」という言葉を聞いたとき
 自信が持てます。.....
41. わたしは、友達に自分の意見や考えをじっくり聞いてもらえたとき、自信が持てます。.....
42. わたしは、勉強の中で、しっかりおぼえることで自信が持てます。.....
43. わたしは、人をわらわせたり、楽しませたりすることで自信が持てます。.....
44. わたしには、わすれものをしたとき、かりたり、かしたりする友達がいることで
 自信が持てます。.....
45. わたしは、みんなから選ばれて係や選手になったとき自信が持てます。.....
46. わたしは、友達から「あなたにまかせておけば安心だよ」という言葉を聞いたとき
 自信が持てます。.....
47. わたしは、いろいろな遊びをすることに自信を持っています。.....
48. わたしは、自分が勉強で人よりもできるとき、自信が持てます。.....
49. わたしは、カードやゲームのことをよく知っていることで自信が持てます。.....
50. わたしは、人の言うことを素直に聞くことで自信が持てます。.....
51. わたしは、けんこうに自信があります。.....
52. わたしは、勉強の中で自分の考えがみんなの考えと同じだと分かったとき
 自信が持てます。.....
53. わたしは、先生に自分の意見や考えを賛成してもらえたとき、自信が持てます。.....
54. わたしは、読んだり、書いたりすることに自信があります。.....
55. わたしには、人に自慢できる得意なこと（趣味、特技）があることで自信が持てます。.....
56. わたしには、よくないことをしたとき、注意してくれる友達がいることで
 自信が持てます。.....
57. わたしは、おこづかいを多くもらっていることで自信が持てます。.....
58. わたしは、友達に自分の意見や考えを賛成してもらえたとき、自信が持てます。.....
59. わたしは、歌ったり、えんそうしたりすることに自信があります。.....
60. わたしは、自分から進んで、そうじや係の仕事ができることで自信が持てます。.....
61. わたしは、運動で、今までできなかったことができるようになったとき、
 自信が持てます。.....
62. わたしは、計算したり、測ったりすることに自信があります。.....
63. わたしは、親に自分の意見や考えを賛成してもらえたとき、自信が持てます。.....
64. わたしには、休み時間、いっしょに遊ぶ友達がいることで自信が持てます。.....
65. わたしは、絵をかいたり、物を作ったりすることに自信があります。.....